

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第114号（2015年11月）

風に吹かれて（92）

白井啓治

『晩秋の陽の下に佇んで何もない何もない』

庭の陽だまりに椅子を出して、ぼんやり天を見上げて、何にもない、と呟いた時であった。二、三羽の雀がやって来た。

小生との戦いに敗れて枯れた草達を菜園に埋めるつもりで、集めて積み上げて置いてある所に、雀がやって来てチュンと声しながら何かを啄ばんでいる。実がなっている訳ではないので、枯草を住まいにした虫達を啄ばんでもいるのだろうか。

『雀がチュンと来て枯草を啄ばんでいる』

枯草と雀を見ながらこんなことを呟いていると、随分暇な爺さんだと思われそうであるが、事実はやっぱり閑な爺さんである。

陽だまりに椅子を出して、新聞を読んでいるのも心を愉快にさせてくれる記事など殆んどない。年寄ると短気になると言うが、全くその通りである。希望の薄い記事を読んでは腹を立てている。大声を出すとかくやって来た小鳥たちがビククリして飛んで行ってしまうので、横目に小鳥たちを映して溜め息を連発させている。

ふるさと風の会の打田昇三兄が私訳されていた「私本・平家物語」全十二巻の完成を記念して、まちかど情報センターで「ふるさと風の文庫展」を行っている。大勢の来客はないが、一人、二人と覗いていくってくれる。しかし、会員の作品をまとめた文庫が主体の作品展なので、長居する人は居ない。出版不況と言われて久しいが、立ち読みする人のいないのは些か淋しく思う。

実際に町の本屋に出かけてみても、立ち読みする人の数は少なく、多くの人はレンタルCD、DVDコーナーにいる。これを嘆いても始まらないが、どうも日本人全体が利根的なものにしか興味を示さなくなってきたという気がして、些か不安になる。

しかし、打田兄の作成した平氏の系図などを熱心に見て撮影して行く人もいて、秘かな平家物語ファンのこの町に居る事を現実のこととして知ることの出来たことは、この作品展に大きな意義を思ふことができた。

打田兄が平家物語に取り組むきっかけとなったのは、ことば座の朗読教室に通われていた兼平兄に平家物語の朗読に取り組んでもらったことである。兼平兄は、目の病などで途中で断念せざるを得なくなつたのであったが、現代語訳などを与えられないで自ら古語辞典を片手に自分なりの理

解をしながら、朗読の稽古に励む兼平兄の姿を見ての触発であつたと思う。

秋の夜長に、この石岡市にゆかりの深い平氏の盛衰物語を古語辞典片手に読書してみるのも、ふる里をヨイショする一つの側面ではないだろうか。平家物語の私訳を終えた打田兄は、次には将門記に挑戦するようである。小生個人的には、将門記の打田昇三版を読んでみたいものと、着手を心待ちしている。

まちかど情報センターでの作品展は初めてのことであったが、時々はどうした作品展をふる里ヨイショの思いを込めて開いてもいいのかなと思っている。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

「神」とは何か(2)

菅原茂美

前号で述べたように、人類は、自然発生的に「心のよりどころ」神」という概念を創り上げ、一族が、ひいては、民族や国家が信奉する「宗教」と、発展していったと思われる。

その信仰する心が、素直にその民族の安寧を願っただけの純真なものであったら、それはそれで、大変結構である。ところが、裏に邪心が見え隠れするようにになると、穏やかではない。

即ち、オレ達だけが繁栄すれば、それでよい…。敵対するライバルは消滅していく事を切に願う。

「恨み・憎しみ」などが小規模なら、単なるお家騒動だが、国家間となると本格的な戦争となる。

人間の性(さが)というか、全ての生物に共通した本性とも言おうか、利己的な遺伝子に支配された「闘争心・縄張り根性」が、えげつなく頭をもたげてくる。そうになると、人類の永遠の課題である「近隣、相仲良く…」という、高次の平和と基本原則が崩れていく。そして必勝祈願→宗教戦争などへと展開していく。

「宗教戦争」は歴史上いかほどあった事やら…。必ずしも宗教の違いだけが対立の争点ではなく、政治や経済が絡み合うから、一層複雑になる。

昔の事はさておき、現代の宗教的対立で目立つのは、イスラエルと周辺アラブ諸国との中東問題である。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の聖地であるエルサレムの帰属問題は、元々イスラエル建国以前に、パレスチナに土着していたユダヤ人は、民族的にはパレスチナとほぼ同じで、信仰する宗教の違いで区別されていた経緯があるという。世界に散ったイスラエル人が、再びパレスチ

ナに戻り、共和国を建設したことが争いの元。

2011年のアメリカ同時多発テロ以降、反米運動が各地で展開され、イスラム教徒と非イスラム教徒の対立は深まり、「文明の衝突」とも呼ばれている。「文明」の定義など、小難しい事はさておき、なぜ人類は世界のあちこちで、こうも対立が続くのか？

イスラムと西洋両文明の衝突なら、狭い所に入り組んでいるので、宗教的にも対立が多々あるう。しかし、戦争とまでは言わなくても、極東の「日中韓朝」のスタモンダは、なんとも見苦しい。近隣同士なら一層、仲良くすべきもののに…。

他国の庶民を拉致し、スパイ行動に活用しようとする。国民が飢えようが世襲の首領を守り、体制維持のため、あらゆる犠牲を国民に課す。少しでも反動的傾向が見えれば、すぐ粛清。

戦争賠償に代わるODA援助が、政府高官の懐に入って、末端にその恩恵が行き渡らない。それを隠へいするために、架空の敵をデッチあげ、反日運動で国民の関心を置換する。また小さな島の領有権やら、勝手に領海の線引きを行ったり、岩礁を埋め立て、軍事基地にしようしたりする。更にはサイバー攻撃により、原発や軍事機密などの先進技術を盗用したり、やる事がミミッチイ。

片や憲法で、戦争放棄した国があるかと思えば、片や70年も前に戦争に勝利した記念として、大々的な軍事パレードを誇示し、世界の批判を浴びる。時代錯誤も甚だしい。更には中立公平であるべき国連事務総長が、ノコノコ出て行って、軍事パレードを観閲するなど、常識を欠いている。出身の国情を表わす低レベルの認識と言わざるを得ない。さて中国は、平和への演出なのか軍隊を30万人

減らすというからオヤオヤと思ったら、230万人から30万人減らすというのでは、知れたものではないか。むしろ機械化を進め、軍事力を強化した事になるだろう。一体、誰を殺そうとして、あのような大量破壊兵器を大々的に展示し、威嚇するのか。腹を膨らませて、体を大きく見せようとする小さな池の「蛙」とあまり変わらない。

世界が軍縮ムードで核兵器を削減しているというのに、中国だけが15年度、逆に核弾頭を10発も増やした。軍事力を強化して、世界に君臨しようとする浅ましい心根が見苦しい。あれだけの人口を擁するのなら、世界から尊敬され、知徳優れた「聖人君子」(※1)が生まれ、国のかじ取りを見事に果たしてよいはずなのに、軍事力強化しか発想が浮かばないのなら、哀れな二等国である。

【※1・今中国では受精卵の遺伝子解析により、生まれながらに障害の遺伝子を持つ卵子を、妊娠初期に、排除するプロジェクトが活動しているという。そこまでなら話はわからないでもないが、更に男女産み分けや、更に将来IQ(知能指数)の低い可能性のある卵子の中絶も視野に入っているという。IQ指数の高い子供だけが生まれてきたなら、どんな国家に変貌する事やら…。こんな恐ろしい話はない。なにしろ犯罪人言論統制で入獄中を表彰するノーベル賞とは、ろくなものではないと、ケチをつけ、受賞のため、本人または家族の出席を拒否している国なのだから…。】

所詮人類という動物は、他の動物とまったく同様。己の生きる場を拡大しようとする「縄張り根性」に貫かれている平凡な生き物だ。動物だけではない。植物も、バクテリアも同じ事。これが40億年前、この星に、原始生命誕生以来、常に貫か

れてきた生き物の本性という事なのであろう。

＊

私は物質世界こそ究極の「実在」と信じている。

人の心も脳内での化学反応・電気反応の結果である。人を『愛しい』と思うためには、脳下垂体後葉から分泌される、オキシトシン（＊2）というホルモンが作用しなければ、愛情は湧いてこない。高次元の「愛や恋」を、物質支配と云われては、あまりにも味気ない話に聞こえるかもしれないが、生き物は、体内のこのような化学反応により、強固な愛情に裏打ちされ、夫婦の絆を深め、協力して困難な子育てを完遂するように、仕組まれている。動物に子孫繁栄をもたらす基本的な原動力は、ホルモンとか、フェロモンなど化学物質のネットワークにより、作り出されたものである。

そういう観点からは、動物も人間も全く同じであり、人間は自然界から超越した、完成度の高い特別の高等生物などでは決していない。

【＊2・オキシトシンは「催乳ホルモン」として、1953年に発見された。わずかに9個のペプチドからなる単純物質である。ところがこのホルモンには「抱擁ホルモン」「協調ホルモン」の別名があり、強い愛情（人間はセックスの時、両性とも、このホルモンの血中濃度が最大値になった瞬間、オーガズムに到達する）を生み出し、確固たる協調性により、多大な犠牲を払ってでも、子育てをする原動力となる。全ての生物は己のDNAを残し、命の鎖を継続するために全知全能を傾ける。】

そうは言っても人類は進化の過程で、食糧を加熱調理し道具や言語を発展させ、益々大脳を発達させて、文明というものを手に入れた。その文明が、人類の繁栄にどれほど恩恵をもたらしたか：

となると、チョイと疑問。私に言わせれば、人類だけが全生物の中で飛びぬけて幸せになれば、他はどうでもよい、という理屈は単なる「エゴ」に過ぎない……と言いたい。

おそらく原始生命は、ただ1個の細胞から始まったはず。それから細胞分裂を重ねるうちに、新たな種に分化し、ついに動物では哺乳類↓霊長類↓人類にまで分化が進んだ。所詮生物は、全てみな親戚なのである。それなのに人類だけが、己の欲望を満たすために他の生物を犠牲にし、種によつては絶滅にまで追いやって、この惑星を占拠し、我が物顔で君臨する事は、マクロの目で見れば、許される事ではない。環境破壊・資源枯渇などをしてまで人類の利便性追求のため、極度に進んだ物質文明は、それこそ「神様」の逆鱗に触れ、この惑星から有害な寄生虫「人類」を、排除すべきと判断されてもおかしくはないと考える。考えようによつては、繰り返される大規模の自然災害は、神が人類に与えた、反省を促すための重大な試練とも受け止められる。

私は大変「聖人」ぶって、こんな大言を吐いているのではない。折角脳味噌を膨らましたのなら、いい加減この辺で目を覚まし、もう少し視野を広く考えるべきではござんせんか？と言いたいのである。時代が進み、国家のようなものが形成されていくと、酋長とか大王などを祀る巨大な古墳や、ピラミッドが造営され、その前で、王位継承の儀式などが行われるようになったと考えられる。しかし儀式の拡大は真に人類の進化に貢献したか？人類の三大革命は、①火の使用。②産業革命。③相対性原理の発見。と、ものの本に書いてあったが、私に言わせると、この三件のほかに、己の

行動を反省し、人の歩むべき道を探求する心を養うため、『神の概念』を創出したことは、人類史上、最も大きな出来事ではなかったか？

＊

理系でコチコチ頭の私は、若い頃から自然科学の進歩を阻んできたのは「宗教」である……と考えた。「聖書」とかいふ人間が作り上げた、架空の設定の下に、保守派の頑固頭が、新進気鋭の科学者の台頭を阻んできた。そのために科学の規範となる偉大な発見も強引に葬り去られたりした。

ガリレオはコペルニクスの地動説を是認したため、宗教裁判にかけられ、科学の進歩にブレーキをかける結果となった。ダーウィンも、下等な生物から進化して、高等な生物に発展していくと唱え、頑固頭に苛めぬかれた。前号でも書いたが、現在アメリカのキリスト教原理主義者は、神を冒瀆する「進化論」を授業で教えた教師を襲撃し、また遺伝病胎児の妊娠中絶を行った産婦人科医は殺害されたりしている（1998年ニューヨーク州）。

更にイスラム原理主義は、1928年エジプトで誕生。エジプトはイギリスの植民地化のため、物質主義の蔓延は、イスラム教の原理を希薄化させる脅威ととらえた。イスラム原理主義者らはコーランを憲法とするイスラム教国家の建設と社会正義を阻害するエジプト王朝とイギリスを敵として1932年、カイロに活動拠点を移し、「ムスリム同胞団」を結成拡大させ、活動を展開する。第二次世界大戦後イギリスからの独立のため、政府要人を暗殺し、ナセルがエジプト革命を起こし、大統領に就任。政府とムスリム同胞団とは対立と融和を繰り返す。後、ムスリム同胞団は、国内分派を生み、更にアラブ各国にも支部が作られ、武

装闘争を展開。過激なジハードへと展開していく。

＊

単細胞の私は、宗教こそ科学の発展を阻害する元凶だと長い間、固く信じてきた。しかし、角度を変え、自然科学史を今読んでみると、錬金術の研究が元になり、メンデレーエフの「元素周期律」が発見されたというし、神の意図を探ろうとして自然を研究した結果が、科学の進歩につながった……と知り、物事は表面のみを見て、判断してはいけないものだ、改めて知らされた。恥ずかしながら、老境に至って、やっと眼を覚まされた。

【自然科学は、一神教から生まれたと言われる。その解説によれば「神」は二つの書物を書かれた。その一つは「聖書」であり、もう一つは、「自然」という書物である。即ち自然を説明するという事は、その造物主の意図を知る事になり、その偉大さを讃える事になる。ケプラーもニュートンも、宗教的情熱から、神の意図を知りたくて、自然を探り、結果として自然科学の発達に大きく貢献する発見につながった。それゆえ近代的な西欧科学は、キリスト教の母体の中で鑄造されたと言われる。オックスフォード・ケンブリッジ・ハーバード大学とも、元々は神学校である。そして、現代科学者の半数以上は、今でも「神や超越的な力」を信じていると言われる。】

＊

我が国における「神道」と「仏教」との相互関係を、歴史的に見ると、それは色々な事があり、仲良くぴたりくつついたり、激しく争ったり。いずれも統治者や庶民の安寧祈願が基礎なのであろうが、それを司る政治家や、神職・僧侶が複雑に絡み合い、和合集散限りなし。

●「神仏習合」

仏教は他宗教に比べると、極めて寛容である。

そのため、一神教の激しさがなく、他宗教とうまく和合している。この傾向はインド、チベット、中国そして日本でも見られた。

わが国においては神道という古来の民族宗教と後発の仏教が矛盾なく信仰され、奈良時代に例えば、藤原氏の「氏寺」興福寺と「氏神」春日大社が、平安時代の延暦寺と日吉大社、東寺と伏見稲荷等のように、これらが同時に祀られ、「神宮寺」として神前で読経が行われた。これらは、同一集団（氏族）が神社と寺院の経営基礎を持ったためと考えられ、明治維新の神仏分離令まで続いた。私の近所石岡の照光寺は、府中松平藩主の菩提寺であるが、そのお墓の入り口には、鳥居があり、その奥に法名を刻んだ墓石がある。

●「廃仏毀釈」又は「排仏棄釈」

広辞苑によると、明治初年の仏教排撃運動。

1868年（慶応4）に神仏分離令が出されたのをきっかけに、神道家などを中心に、各地で、寺院・仏像の破壊や僧侶の還俗強制などが起きた。

廃仏毀釈は江戸時代、国学や水戸学から仏教排撃の思想が広まり、明治政府の宗教政策にも受け継がれた。

神仏分離令の目的は、神社から仏教的要素を一掃し、全国の神社を直接支配下において国家神道政策を進める事にあった。江戸時代、檀家に威勢を奮っていた仏教に対する反感が強く、低い地位に追いやられていた神官や、僧侶から収奪され続けていた民衆は、徹底的に廃仏毀釈運動を展開した。1876年頃まで、寺院の破壊は続き、全国のおよそ半数の寺院が廃絶され、貴重な古文書や

文化財が失われた。首のない路傍の石仏には、心が痛む。

＊

唯物論者に近い私が、「神」の概念について述べるなど、おこがましい限りである。しかし脳味噌を発達した人類という化け物が物質文明をひけらかし、あまりにも傍若無人な態度に「神」の怒りが頂点に達し、大きな天罰を下される感がしてならない。奢れるもの久しからず。平家滅亡は他人事ではない。人類全体への警告と受け止めたい。全ての生物はただ1個の原始細胞から分派したものだ。いわば生物はみな兄弟ととらえるべきである。人類の好都合のため、他の生物を絶滅に追いやるなど、これ以上の罪悪はない。抜きん出た一種の生物だけが、この惑星を支配してよいわけがない。慎ましやかな反省の元に、折角大脳を膨らましたのだから、もっと思慮深く、生命進化の道を自ら正す姿勢・軌道修正があつてしかるべきである。

経済発展こそ政治の基本みたいな事に世界各国が血眼になっているが、そのために地球環境を荒廃させるなど、拙劣極まりない。もっとスローテンプに文明は進化していくべきもの。緑豊かな地球環境の維持こそ政治の本命であろう。

起承転結も整わず、独善と偏見を顧みず、やたら吠えまくったが最後に一言。一神教の原理主義者達に告ぐ。あなた達の神だけがこの世の全てではありませんぞ！ それぞれの人や国に、それぞれの「神」は存在するのだから、それを尊重し、互いに仲良く暮らしていこうではありませんか。

真壁地区 (2)

○ 白壁と真壁

真壁はひな祭りとは江戸時代の武家屋敷などが残る石(花崗岩)の街として知られます。

この真壁という名前は、奈良時代にはここに「白壁郡」が置かれたが、この白壁という名前が「白壁王」と言われた「光仁(こうにん)天皇」(藤原氏が担いで晩年になって天皇になった)がおり、後にこの白壁はまずいだろうということになり名前を「真壁」に改めたという。

真壁の伝承館の歴史館に置かれていたパンフレットによれば、この白壁郡という名前の前に「雄略天皇の子、清寧天皇の御名代として白髪部をおく」とあり、これが白壁、真壁の起源であると書かれていました。

奈良朝になる前まではこの地は新治郡で、710年の奈良時代になり常陸国に十一郡が置かれて、白壁郡ができたようです。そして785年に白壁郡を真壁郡に改称した。

さて、奈良時代にあつた白壁郡という郡は、筑波山の西側麓一帯をさして呼んだらしい。合併前で言えば明野町やこの真壁町あたりだと思う。その時の白壁郡衙(ぐんが)は真壁城跡あたりにあつたようだ。

しかし今から1300年前に書かれた「常陸国風土記」には、この白壁郡のことには触れられていない。郡となつて新しいので新治郡と同じようにみなされていたのかもしれない。この新治郡は、昔の協和町(新治駅)近くに郡衙中心があつたとされる。

風土記には、当時の新治郡には面白い記述がある。

「昔、美麻貴の天皇(崇神天皇)の天の下知ろし食しし御世に、東国の荒ぶる賊たちを言向けようと、新治の国造の祖先となつたひならすの命を遣はした。ひならすの命がこの地で新しい井戸を掘ると、清き水が流れ出た。新しい井を治(はつた)ことから、新治の名がついた。諺に「白遠(しらとほ)ふ新治の国」といふ。この井戸は今も新治の里にあり、季節ごとに祭が行なはれる。

郡家(郡庁)より東五十里のところに、笠間(かさま)の村がある。村へ通ふには葦穂山(あしほやま)を越えねばならない。葦穂山には昔、油置売(あぶらおきめ)の命といふ山の主(山姥)があつた。今は森の中の社の石屋に眠つてゐる。こんな俗謡もある。

言痛(こちた)けば をはつせ山の 石城にも率て籠もらなむ な恋ひそ我妹(わがも)

(もし人に知られて辛くされたら、小初瀬山の石室にともに眠らねばならない。だから気持ちを押さへてくれ、私の恋人よ。)(口訳・常陸国風土記より)

この「油置売命」は山賊と書かれたりしているが、この時代では蝦夷人で、書き方からすると老婆が、この芦穂山(現足尾山)の岩穴に住み着いていたと書かれていると解釈できる。

新治郡の郡衙からこの足尾山を越えて笠間の村に行くとき書かれている。

今では新治駅から国道50号線(または水戸線)を東に20百で山越えはない。しかし、当時はこの芦穂山を越えたという。

笠間というのもこの頃の村は来栖(くるす)(栗

栖あたりをさしていたものか?

もう一つ、「諺に「白遠(しらとほ)ふ新治の国」といふ」という表現だが、この「白遠(しらとほ)ふ」という言葉の解釈がいろいろである。

まあ「枕ことば」のようなものだとか解釈されるのだが、やはりこの白壁郡(白髪)とともに気になる。さて、万葉集に高橋虫麻呂の歌が載っている。

筑波山に登れる歌

草枕 旅の憂へを 慰(なぐさ)もる こともありやと 筑波嶺に 登りて見れば 尾花散る 師付(しづく)の田居に雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治(にひはりの) 鳥羽の淡海(あふみ)も秋風に 白波(しらなみ)立ちぬ 筑波嶺の よけくを見れば長き日に 思ひ積み来(こ)し 憂へはやみぬ。

ここにも「白波立ちぬ」となっている。真壁は花崗岩が昔から豊富で見た目でも白く見えたのだろうか?

○ 伝正寺

実は真壁で最も有名なのは昔なら、この伝正寺かもしれない。「どっこい真壁の伝正寺(でんしょうじ)」と言われた。

曹洞宗天目山伝正寺は文永五年(1268)年に真壁城主真壁時幹により開山したと言われる。

ここには昔に教科書にも載る話が伝わっている。城主時幹の下僕であつた「平四郎」が雪の日に主人の草履を懷で温め、主人の前に出した。太閤記なら秀吉は出世するきっかけとなるのだが、この時の主人時幹は、草履が暖かいのは平四郎が自分の尻の下に敷いていたためだと思ひ込み、激しく

叱責した。このため、平四郎はこの地をさり京にのぼり、中国へ渡り修行をして立派な僧侶（禪宗）となって日本に戻ってきた。そして亀山天皇から「法身国師」の号を送られ、鎌倉5代將軍北条時頼はそれまで天台宗であった松島瑞巖寺（当時は円福寺）の僧を追い出して、この平四郎（法身）を住職に据えた。

その後、法身（平四郎）は数年後に松島をさり、真壁に戻ってきました。時幹はえらい僧侶の法身が城下に来ている事を知り、呼び寄せました。そして昔の事のいきさつを知り、今までの非道を詫び平四郎のために「臨済宗照明寺」という寺を建立しました。

これが今の伝正寺になったといえます。この話では時幹が法身を招いた時に、法身は「私をご存知ありませんか？ 昔、下僕をしていた平四郎です。私はあなた様の叱責を受けて、こうして修行をして今があります。もしあのことがなかったなら、今も下僕のままだったでしょう。そのような機会を頂いたあなた様を恨むなんてとんでもないことです。とても感謝しているのです。」と…。

その後、康正二年（1456）相模国の海蔵寺住職安叟宗楞禪師がこの地に来て、臨済宗は曹洞宗に改宗されました。

この平四郎（法身国師）は、文治五年（1189）現在の筑西市猫島の高松家の生まれと伝えられています。この猫島と聞くと思ひ出すことがあります。そう、陰陽師の安倍晴明の出生地とも言われる所です。何か不思議な気がします。

さて、この寺をさらに有名にしているのは、実は真壁氏は徳川の時代になって佐竹氏について秋

田角館に移り、その後、関ヶ原で功績のあった浅野長政が和歌山城をもらうことになりましたが、この和歌山を息子に譲って、自分は隠居の身となりました。それを知った家康がここ真壁（5万石）を長政に譲りました。

この浅野長政がこの伝正寺を浅野家の菩提寺にしたのです。ですから長政の墓もここにあります。そのため赤穂の浅野家の菩提寺でもあるのです。赤穂浪士の中には、親の代などがここ真壁や笠間の出身である浪士がたくさんいました。そのため、ここにも四十七士の墓も作られていると聞いてきたのですが…。

行ってみて驚きました。入口山門は荒れ放題で、中に入ることもできません。寺は大幅な改築工事をしているようで、見学できませんでした。

この伝正寺からの眺めは素晴らしかったようで、昭和25年選定の茨城百景には「伝正寺と加波足尾」（真壁城址、加波山神社）が選定されています。この寺の前に温泉旅館「桜井館」という施設があります。もう何十年も前に、一度温泉（鉱泉）に日帰りで昼間に訪れたことがあります。

昔、芥川龍之介などの文豪も泊まった宿だそうで、由緒があるというので行ってみたのですが、真壁石の浴槽が2つあり、いかにも田舎の宿という感じの施設でした。今の人から見たら驚くような田舎風の宿で、釣り人などが泊まる山小屋のような感じでした。

源泉は温度が低く沸かし湯でした。風呂から上がると宿の女主人が、広間で熱めのお茶を入れてくれたことが忘れられない思い出として残っています。その山のいで湯的な「桜井館」も全面リニューアル中でした。昨年7月に立派なきれいなホ

テルとして生まれ変わったようです。

○ 真壁伝承館

真壁の伝承館という本館、図書館、歴史資料館という3つの複合施設が2011年秋にオープンしました。場所は江戸時代の街並みが残るエリアですが、この場所には陣屋（笠間藩）が置かれていました。

綺麗で羨ましい施設です。やはり町並みのイメージに合わせた設計となっています。本館とその隣に図書館があり、奥に歴史館がつながっています。歴史館も入館無料です。

歴史館は入ったところに各種パンフレットと、最初に真壁を中心とした歴史年表とそれぞれの時代の発掘された土器や、当時使われた道具などが展示されていました。

最初に綿産業の道具の展示があり、ここ真壁は江戸時代に繰綿（綿花を綿繰り機にかけ、種子を取り除いた物）や綿毛作りなどが盛んであったと書かれています。伝承館の敷地には「神武神社」があり、真壁小学校がここにあった記念碑（百周年）があります。

○ 花の井酒造

先に紹介した「五所駒瀧神社」に奉納されていた酒樽に「花の井」と銘があった。

街中を少し散策していて、この工場を見つけた。創業は天明2年（1782）というからかなり古い。この米蔵は国指定の有形文化財に登録されている。また内部をギャラリーとして開放しているようです。会社のホームページを見ると、

「この地は昔から良質の米と、御影石という名で

知られる花崗岩地帯を浸透して湧き出る清らかな伏流水のある所として有名です。近江商人として酒造りに適したこの地で創業以来220余年、伝統を守ると共に常に進取の精神で真摯に酒を造り販売することに励んで参りました。」と書かれていました。

この横の通りを南に行くくと羽鳥地区(桃山中学校前に「筑波登山本道」という分かれ道がありました。恐らく真壁陣屋から筑波山に登る旧道だと思われます。

(続く)

八木を一回り

伊東弓子

八木。遠くまで行くという感はない。若い頃、何度か訪れた所だし、六〇七年前には御留川を舞台に物語の世界に入り込んで何度か足を運んだ。そして今は歴史の一つ一つを深く知ろうとして尋ねる所だ。

知らせを配って歩く中で沢山の人に合った。お年寄りが多かった。お婆さんは、待っていてくれたかの様な、懐かしい姿が多かった。お爺さん達は立ち止まっていてこちらから近寄っていくのを待っていた。

「あれ、この間来た人だね」

「あっちの方の川のことだよな」

など二回めの知らせを手にして、次々に声をかけてくれたのには驚き、嬉しかった。

「よくやってんな。この辺は何もないよ」

市から届くチラシのことを話すと、

「隠居じゃ回ってこねえよ。知ったところで字

は小さいし、訳わかんないよ」

「遠くじゃ行けないし、俺たちとは縁のないような事ばっかしだもん」

こういう話を聞くと、文化活動といって予算を使っているのは、極一部の人であって大多数の人にとっては程遠いものだと思わざるをえない。

八木の区長さんと話す中で、この地域は区長、副区長、惣代という組織がある事を知った。それぞれの役に話しておくので心配せず配っていいと了承してくれた。珍しい組織という疑問は後で分かった。

当日の予報は雨も散らつくと聞いているので不安も拭いきれなかったが、火花が上がっているのを聞くと期待をもつての出発となった。JA南での集合は二度目、慣れた雰囲気次第に集まってきた。相乗りして出かける事も皆気持ちよくまとまって出発出来たが、私の道案内が適当でなく道に迷った一行があった。

稲刈りも済んだ所が多い。刈った後に芽が出て田を緑に染めている。中堤の土手の草が色づいて対称的にはつきり見える。よかった。出来なかった事を記すのも尾籠がましいが、みんながより分かりやすいように自転車で轍を背負って走ろうと思った。

「ここは江戸時代の水辺よ。漁場が三ヶ所あった所よ」と、車の中から見て貰おうと思ったが、準備不十分で断念した。

公民館駐車場に着くと、縄とき地藏尊の堂が目に入る。十体以上の佛達が居並ぶ、長い月日この地域の女達が心から大切にしてきたものと一目で分かる。筑波の山を見通すことの出来る北側の方から風が流れ、飾られた花々を撫でている。地藏

尊にまつわる話の中で決して人殺し等凶悪犯罪者ではなく政治犯であると聞いたかすかな記憶。又縄を解かれた所は八木ではなく他領に近い所だという疑問が六十年も経った今回解消出来た、と喜んだがその間調べようとしてこなかった事になる。

「あまりそういう話しはすんな。八木の人達がみんな罪人の子孫になつてしまふから」

「縄をとかれる前に足をこつ酷く叩かれたそう。だから今でも足の悪い人がいるとか」

「名字の違う人は余所者だ」

と、事実とはちがうことももらしく語られていくのが世の常だ。罪人が送られてくる布令が来ると、八木村は迎えの舟、人、送る舟、人、役人の宿泊、食事の世話等村あげて負担を負わされ、季節関係なく無報酬であったと伝えられている。

この地にまつわる若い囚人と、貧しい農村の娘の一生掛けて結ばれる話など綴ったものだ。またまる事なくどこかに積み重ねてあるだろう。

北の道を降りると中堤(中堤坊、内堤)といわれている堤が田の間をくねくねと走り、山崎の方へむかう。この堤添いに波がよせ、乗添川、御殿下川、松下川の漁場が三ヶ所あった。大網を張り、大声をあげて網を引き、漁をしていた。筑波おろしの冷たい風にもめげず、男達は何の為に誰の為に生命を燃やしていたのだろう。今は見る影もない。趣味的に行われているのが現状だそうで、唯一石岡の方に住んでいる地元出身の人が毎日通ってくるそうだ。

干拓事業に対して羽成卯兵衛氏を称えた碑、堤防工事の記念の碑がある。多くの人の手と多額の資金を投じてこの事業を進めた卯兵衛氏の度量・

努力・答えて協力した人々を思うと胸が熱くなる。が、この碑は見づらく何の為に造られたかと疑問だ。何年か前の航空写真は実りの秋の美しい干拓風景だった。右は（浜羽干拓）縦長の田、左は横長の田、とても美しかった。少し前には干拓は泥深いので稲より蓮がいらいしい。大部転換しているよ、と言ったが今は蓮田も後継者がなく荒れている。手がかけられなければ荒れ放題になるだろう。いつそ堤防も壊れて水に覆われて流れ海に戻った方がいいわ、と言うと、ある人がここは六十町歩の日本一の干拓だから、ある意味で守らねば、との事だった。干拓は勿論、八木地区を守る堤防の為に大量の土が使われたことだろう。

越番河岸跡は高浜入りでは一番狭い大井戸と八木の渡し場だ。建設材料が置かれて、草が茂っている。河岸の番をしていた人の数が、大きな木の下にある。役目を果たした漁具や現代の廃材が所狭しと置いてある。沢山の人が往来した通りに人影はない。私達だけだ。

堤防に立つと左奥に高崎、高浜、筑波山が、目の前に出船と呼ばれる玉里の半島が、右には高浜入りでは一番広い流れが東南に広がっている。みんなで感動していた。特に玉里の人は、

「わあ、これ玉里なのね」

「こっちから玉里を見たのは初めて。素晴らしい」

「いろんな方向から見るといいね」

「ものは、角度をかえて見るって大切ね。本当のよさはわかんないよね」

など会話が弾み見とれていた。

この会の成果の一つとも思ったりしていた。震災の時はこの堤防の三分の一が崩れ、修理に二年

位かかった。又公費が沢山使われたことだろう。

八木地区が堤防で遮られる前、畑のすぐ下の波打ち際で遊び、田の傍の狭い砂浜で寝そべった遠い日の思い出を語ってくれた婿取り母ちゃん達三々四人の共通の話は、今日の参加者と年齢が重なって楽しかった。

学芸員さんが玉里、そして山崎の森から風返し古墳群の話しを熱っぽく話してくれた。興味深かったのは古墳と現代の墓地の共通点を話されたことだった。時間を越えて現代人と古代人の共通したもの、改めて不思議さを感じた。

又感動を一つ見つけた。今、田で埋めつくされている所は流れ海の入り江だったろう。すべて水面が覆い、魚や貝が豊かな流れの中で育まれていたことだろう。国府から馬で来た使いは、高浜、古津（現在のいづみ荘の辺り）から船に乗り、山崎の森、そして月の台の駅家から馬で出島を横断し馴馬にむかい、遠く畿内に向かったという。昔のことだ、では済ましたくない。確かに人が生きていて都を造り、国府を中心に集い歴史を作ってきた。私もその道を捜して生きている。

現代の道を歩きながら、古代の道を偲びながら歩く会を終わった。前回より早めに終えたことが参加者の気をよくして、さあーとかかった雨にも心地よい印象だった。

八木地区の方たちは、石川小学校の運動会に地域あげて家族総出でとりくんだったろう。帰りに一寸寄ってみた。やがて高浜小学校へ統合される石川小学校の子供たち、大人、地域力を見せてもらったおもいだった。

八木から三ッ谷、高架津、小津、柏崎、田伏そして大橋は遥かに遠い。終る迄元気でいたいとい

う反面、一人一人が心配していることが時々口に出る。先日「名前だけ見ていた時は、もつと若い人かと思った。結構年配の方ですね」との言葉には一瞬どきつ。でもこれは現実なのだ。

表情と体力を若々しく保つていこう。
いよいよ次回から、かすみがうら市に入る。

大日本飛行場石岡飛行場 小林幸枝

石岡に飛行場があったと父に聞いてから、調べたら海軍航空基地と大日本飛行場の二つあったことを知りました。先月号に海軍航空基地を紹介しましたので、今回は大日本飛行場について紹介します。

大日本飛行場石岡飛行場は、1940年（昭和15年）紀元二千六百年記念事業として、石岡町半木の原野や畑地約99.2ヘクタールに大日本飛行協会中央滑空訓練所として建設が始まりました。そして1941年6月7日、格納庫（間口20メートル、奥行き26メートル、高さ12メートル、練習機約20機）、飛行場事務所、宿舍2、講堂、油庫、修理工場、食堂、自動車庫車庫などの飛行場関係施設とともに、初級から高級までの各種訓練機を備える、大日本飛行協会中央滑空訓練所が開設されました。

1942年の第十二回明治神宮体育大会滑空演練大会では滑空演練会場として脚光を浴び、町民はこの滑空機を親しみを込めて「グライダー」と呼んでいました。

大日本飛行協会は、航空思想の普及と滑空訓練、航空文化の発展を考えて「大日本航空少年隊」を

組織し、石岡国民学校にも石岡分隊を結成しました。

1944年には大日本滑空工業専門学校が開設され、滑空や機体製作などの理論的研究、各種の演習などが行われました。

また若松町に滑空機製作工場が建設され、部品から完成機まで一貫した本格的生産を行うまでになりました。これにより石岡は、滑空機の製造・訓練・教育と滑空界の一大拠点に発展したのでした。

1945年になると、海軍飛行予科練習生だけでなく、予備学生もこの滑空訓練所で訓練を積みました。しかし、戦局が悪化し、石岡にもアメリカ軍機が飛来してくるようになり、機銃掃射によって予備学生の戦死者を出したそうです。

県指定文化財(8)

兼平智恵子

秋の行楽地に石岡の歴史を尋ねて下さる団体の皆様が例年より多く感じられます。(九月十五日〜十一月二十一日まで案内要請のありました団体様十二団体と自由見学二団体そして講師の方つき二団体)

今年四月より開館しましたふるさと歴史館(以前は石岡市民俗資料館、金・土・日・祭日開館)は現在、月曜日を休館とし毎日開館しております(但し月曜日が祭日の場合開館し、次の火曜日が休館となります)。

主に埼玉、栃木、千葉、神奈川、東京方面等遠くは北海道より(茨城空港を利用)のご夫妻等六十、七十代のご夫妻でのご来館が多く見受けられ、ほほえましくも、私は羨望の眼差しを注いでしま

ます。

「仕事でいつも素通り今日はゆっくり見させて頂きます」、「仕事の合間にきました」、「中世のお城を研究します」陣屋門を見に来ました」等々、また歴史館になりましたからは、二ヶ月位の間隔で企画展が行われていますので市内の皆さんも関心を寄せてのご来館が増えています、心強く思います。

市民の皆さんが石岡の歴史を尋ね、知る事によって、ご来市の皆さんへの歴史のご案内において立つこととなり「歴史の里いしおか」の街おこしの一環としても大きな力になると私は信じております。

旧八郷地区を中心とした自然の美しい里山と、とれたてのフルーツ(四、五、六、九、十、十一月は石岡駅からぐるりんバス運行)、旧石岡市街地の歴史スポットに市民の皆さんも大いに関心を寄せ、子供さん、お孫さんと共に石岡を満喫しましょう。

今回の県指定文化財は石岡のおまつりの第一日目神幸祭のお仮屋に向かう渡御と三日目の本殿への還御の際の露払いの大役を務めます「富田のささら」についてご紹介します。

○富田のささら

無形民俗

平成八・一・二十五

石岡市教育委員会発行「石岡市の文化財」によりますと： ささらは、別名三匹獅子、三つ頭獅子、単に獅子と呼ぶところもある。富田は「ささら」と呼んでいるが、これはこの獅子舞の際に、サラサラと音を出す伴奏用の楽器の名前からつけられている。

ささらは、神または神に近い霊獣として神格化

されたもので、悪魔祓い、無病息災、五穀豊饒を祈願する農耕民衆の集団的信仰に基づいて、町内の行事として受け継がれてきたものである。富田のささらは、獅子頭をつけた3匹の人形のようなものを3人でそれぞれ一つづつ支えて振るもので、道をねり歩く時は横2・8m、縦2・3mのわくに幕をはり、ささらはそのわくの中で踊り、屋台式に車をつけて引いて歩く。：

富田のささらにつきましては当会報平成二五・九月(八八号)、平成二六・二月(九三号)にご紹介してありますので重複する所が出てきますが、県指定になりました時に、富田町町内会、富田町ささら囃子保存会発行の「石岡 富田のささら」の記念誌より「ササラの起源」について一部抜粋してみました。

……ササラ(三匹獅子)の起源についていくつかの神話、伝説があるのでその一つを紹介すると、後醍醐天皇の延喜年間(西暦九〇〇年)今より一〇七〇年前に奥州において鎮守府將軍の藤原利仁公が勅命を受けて賊党を討伐し都に帰ろうとして病死し、その葬儀のとき、魔徒の仕業であろうか、一天俄かにかきくもり昼夜の区別のないほど暗くなり、將軍の家臣どもがこまり、悪魔を退散させようとして男女の三種に分けた首を刻み三人の家臣にこの首を冠らせ舞わせたところ、たちまち一点の雲もなく晴れわたり、無事に亡骸を葬ることが出来たので、この三つの首を御神獅子と号した、と言う意味が『天下一関白神獅子開起由来記』に記されている。

また埼玉県神職会『埼玉獅子舞一名鯨獅子』刊行年不明。によると、後深草天皇の西暦一二四五年(今より七六五年前)獅子舞が始められたとある。

其のほかにも残された文献により起源はまちまちであるが実際に関東から東北にかけて普及したのは、徳川中期以降とされている。

富田のササラについても資料がないので残念ながらはつきりしないが、府中在の三村に現存するササラは享保年間（西暦一七二六年〜三年）今から約二五〇年前位と言われているので一般的起源と大体会致するようである。古老の話によると富田のササラは三村より古いとのことであるから、約三〇〇年前の西暦一六七〇年頃のもので、少なくとも元禄年間以前のものであると推定される。：

多くの謎に包まれた愛くるしい富田のささらは以前は年番の時だけのお役目として、特別な出し物とされていたそうでその後五年に一度、三年に一度と毎回の役目は平成十年辺りからと聞きま

す。富田町の宝として、石岡市の宝として、大切に保存され、伝承されることをお祈りしています。

悪僧記

打田昇三

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」と言う句があるけれども動物は本能的に危険を察知して身を避けるが、人間は中途半端に進化したから本当に怪しいものと、見掛けが不審でも無害なものとの区別が十分に出来ず、対応を誤って犯罪に巻き込まれたり、逆にチャンス逃したりする。其処で他人の弱点に付け込んだ悪徳商法やら怪しい宗教が起こ

り、人心を惑わすことになるのであろう。

冷静に考えれば宗教は思い込みの世界に過ぎないから中には眉唾なものもある。日本に「教祖」なるものが誕生した時期は先ず鎌倉時代の初期、次が江戸時代の末期から明治初期にかけて、さらに第二次世界大戦による敗戦の前後だと分析した学者がいる。つまり既成の権力が崩壊するか弱体化すると従来の価値観が否定され民衆は不安に慄（おのの）いて何かを頼る。それを狙ってゴキブリのように新興宗教が湧いてくる。中には宙に浮く教祖とか、言い当てる預言者などが出てくるが「それがどうした」と思えば驚くことはないし、野生の動物は、身を守る為に生まれて直ぐに飛んだり走ったりする。人間も猿の子孫と言われるから稀に野生時代の特異な能力を保持している者が居ても不思議では無いと思う。

或る大きな宗教団体の機関紙に教祖様の神秘性を称える記事が有り、同じページに「歯が痛ければ歯医者さんに行きましょう」と書いてあった。歯科でも内科でも、具合が悪ければ電話を掛ける先は教団本部では無く医療機関であろう。偉そうなことを言っている宗教団体でも教祖の病氣は治せないであろうし、釈迦は毒キノコで死に、キリストは磔（はりつけ）にされている。

日本に仏教が伝来したとき、そのシナリオである経典は難しい漢字で書かれていたため、学識の有る僧にしか読めなかった。さらに当時の朝廷や貴族たちがエリート意識から仏教に首を突っ込んだけれども専門用語であるから疑問は僧侶に聞くしか無くて社会的に僧侶の地位が上がった。

天皇制が定着し始めた天平年間、諸国に国分寺、国分尼寺が建立されるが、其処は官立の祈禱所で

あり、小難しい經典研究の場で有ったろうから、現代の寺院のように庶民が気安く行ける場所では無かったと思う。言わば仏法の名の下に隔絶された別世界であつたろう。江戸時代でも「国分寺や国分尼寺などは無かった」と自信たつぷりに書き残した勇氣有る学者がいるくらいである。

「無かった！」と言うのは偏見にしても、評判が悪かった国分寺、国分尼寺が朝廷と貴族の手から離れて、少しずつ庶民に開放され出したのは、多分、平安京遷都以降のことと推定される。言い換えれば朝廷や貴族の専用であつた仏教が庶民でも利用？出来るようになったのである。単純に考えれば喜ばしいことではあるが、それと共に仏教界が墮落し、僧侶と一部の金持ちなど特権階層が寺院を私物化するような兆候さえ出て来た。

石岡にも「川を挟んでわざわざ両岸に建てられた国分寺と国分尼寺の間に橋（渡り廊下）が架けられて居た」と言う出所不明の噂が有る。何の為の橋かは、分からない人には分らず、分かる人には分かる。国分寺と国分尼寺とが親密に交流する必要は無かつたので、橋は個人的に使われた。

弘法大師が留学から帰って何年か後の弘仁三年（八二二）夏、嵯峨天皇が諸国の寺院に勅語を下した。内容からすると、天皇が言うべきことでは無いが、敢えて言わざるを得なかつたのである。「…此の頃、俗輩の男女、事を聴講に託け濫りに僧尼の寺院に入り、説法訖りて後、屢侵犯の事あり、外は勝因に似て内は却って浄業を汚す。自今以後、男子尼寺に入り、女人僧房に入るべからず…」つまり、その辺の男女が聴講にかこつけて寺院に入り込み、行事が終わってからラブホテルのようなことに利用している。（当然、僧も尼僧も協力して）是は

仏法を冒瀆する所業であるから今後は男性が尼寺に入り、女性が寺院に入ることを禁止する…」という厳しいが当然のお達しである。

嵯峨天皇自身は檀林皇后こと橘嘉智子の他に三十人近い側室を雇って？居たので「自分はどのようなのだ！」と言われると、返答がし難いような勅語になってしまったけれども、諸国の坊さんと尼さんには厳しいお達しになった。此の勅語によって常陸国分寺と国分尼寺の間に掛かって居た連絡橋が外されたかどうかは分らない。

其の勅語が出る頃に、或いは其の勅語が出される契機になったと思われる事件が京都中心部のある大きな寺院で起こった…と言うよりも長い間、隠されていた大寺院の秘密が白日の下に晒される出来事があった。此の話は主人公が生死に関わる苦難を受け、波乱万丈の出来事を体験した後でハッピーエンドを迎えるという筋書きであるが、其処には墮落した仏教を再生させ、更に「因果応報」の思想を植え付ける意図が感じられる。其の頃から出来始めた説話には「仏罰」を強調しているものが多いが、それには、やがて鎌倉仏教として登場して来る「来世希求の浄土思想」…その萌芽が認められると専門家は述べている。

前書きが長くなったけれども、物語の本题に入らせて頂く。是は「前々太平記」という古書に漢文書き下しで伝えられている話であるから、なるべく忠実に書くが、必要なことを説明したり現代的で無いことは表現を変えたりした。話の中で稀少な経験をしたのは、その当時、北陸の或る地方から花の都に出てきた一人の若者である。

主人公の名前は朝山源十郎と言う。朝山家は先祖から素性正しい小領地の領主では有ったが徐々

に衰退し、源十郎は早く両親に死なれて兄弟が無く、武士として仕える主君も無く、働く手段も無く暮らしていたから次第に困窮してくる。遅いけれども是ではいけない！と気が付いて、十七、八歳の頃に都へ上り勉強して役人になろう…と決心をした。残っていた田地畑、家屋敷、家財一切を売り払い、その現金と行李（こり）に詰めた衣類などを背に負って、住み慣れた故郷を離れ都への旅に出たのである。

北陸から平安京へ向かうには近江路に出て琵琶湖の西岸を下って行く。比良山麓にある志賀の里が近づく頃には、秋の日が思いの外に早く暮れて往來の人通りも絶え周囲は闇に包まれた。緩い坂の向こうには人家の灯火が見える。源十郎は足を速めて坂を越え掛けた。其の時に、何処から現れたか何人かの盗賊が襲い掛かってきて、源十郎を木の枝で打ちのめし、何が起きたか考える間もなく衣服を剥ぎ取り、現金を奪い荷物を盗ってから風の如くに暗闇に消えてしまった。

それは一瞬の出来事であった為に、呆然自失状態から風の寒さで我に返った源十郎は、身体の痛みを感じるとよりも全財産を失った丸裸の身に気がつき、暗闇の中に立ち尽くしている他はなかったのである。暫くして源十郎は、坂下の集落に来て無人の納屋近くから捨てられた古い菰（もも）を拾って腰に巻き付け、琵琶湖湖畔に建つ漁師と思われる一軒の家に声を掛けて救いを求めた。

出て来た主人は、物乞いよりも酷い格好の源十郎に驚いて警戒したが、涙ながらに盗賊に遭った経緯を話す態度に同情し、家の中に入れてくれたのである。主人は「…此の所、北の山に盗賊が住み付いて悪さをする！と言う噂は有ったのだが

やはり本当であったか！」と、衣服を与え、食事を供し源十郎の生国・姓名を訊ねた。

朝山源十郎は本国・姓名・先祖からの家系・都を目指す目的などを包み隠さず申し述べた。家の主人は源十郎の言葉を信じてくれ「…私は見たとおりの漁師であるから今の貴方の困窮を救える立場では無いが、かつては藤島平太と申して武士の真似ごとをしていた。事情が有って漁師の久佐吾と名乗り、妻と二人で今の暮らしをしている。些少の路銀は差し上げられるから、夜が明けたら都に上り、名の有る方に仕えて目的を達するようにされよ…縁があれば再び会うこともあるう」と源十郎を激励し宿泊させてくれたのである。

翌朝は釣った魚を煮て暖かい食事を供し衣服と路銀を与えて夫婦で源十郎を送り出してくれた。源十郎は「此の御恩は忘れません。既に父母が居ないのでお二人を両親とします。都で暮らしが立つようになったら必ず御恩を報じに戻って参ります…」と約束をして別れた。

京の都はさすがに広く、源十郎は戸惑いながらも取り敢えず遠縁の者を訪ねたのだが、此の者も貧しかったので居候は出来ない。借りた衣服しか無い源十郎は就職の面接にも行けず心は逸れど為す術も無く無駄な日々を過ごしていた。すると或る者が「貴方が何か得意なことがあれば、今は寺院の景気が良い時代であるから、何処かの大きな寺に行つて売り込んでみてはどうか…」と教えてくれた。源十郎は喜んで京都郊外に有る大きな寺を見つけて自分を売り込みに行った。

応対に出た僧に、源十郎は先ず「自分は流浪の者…」と断つてから、途中で盗賊に襲われた経緯を説明して粗末な服装の言い訳をした。それから

勉強したい希望を述べて、水汲み、掃除、洗濯など雑用にでも雇つて貰えないか？と尋ねてみた。

応対したのは清真と言う僧で、此の寺院の事務方を担当していたが、源十郎の人品卑しからぬ様を見て「貴方はどの様な技芸を持つのか？」と訊ねた。源十郎は「幼少の頃から書を習い、絵を描くことも好きで花鳥山水を自由に描いています」と答えた。そこで清真が紙、墨硯、筆を出して其の場で描かせると文字、絵共に見事に仕上げた。

清真は感心して「此の寺院は廣いから、貴方一人を養うことはたやすい。先ずは愚僧の坊に案内をしよう。」と言つてくれた。こうして源十郎は清真の坊舎に住まわせて貰い、此の大寺院のパート職員として採用されたのである。下積みの雑用係として雇われた身であるから種々雑多な用事を命じられるけれども、その才能は清真が認めてくれているから清真の口利きで寺の高僧たちにも折りに触れて教えを受けることが叶つたし、出入りする文人墨客にも顔を知られ都でも身分のある人物を友とすることが出来るようになった。後は寺の居候で無く独立した職業に就ければ良い。

そうした暮らしが二年ほど続いた或る日、主人である清真が外出をしたので、源十郎も久しぶりに休みを貰えた。清真の坊舎から離れたことは無い日常で行く当ても無かったが、清真の同僚である為空（いく）という僧の坊舎を訪ねてみることにした。しかし為空も不在で、何人かの小坊主が陽溜りで居眠りをしていた。同じ寺院の内とは言つても独立した僧ごとに坊舎が置かれていたから源十郎は為空の僧坊内を知らない。周囲を歩いているうちに微かに双六の賽（さい）を転がすような音を聞いた。誰も居る筈が無い場所であるが奥ま

った所に在る楼閣に誰かが居る気配がした。

好奇心で登つてみようとしたが階段は隠されたように付いている。それを探して登つて行くと、櫓の上が隠し部屋のようになつていて、中に二人の若い女性がいた。どちらも美貌ではあるが一人は京の街でも余り見掛けないような美女である。二人は源十郎を見て驚き怪しむ様子を見せたので、源十郎は慌てて身分と為空を訪ねて来たことを説明し、賽の音で興味に惹かれて上がつて来た言い訳をした。ところが二人の女性は、源十郎の言葉を遮るように、声を落として驚くべきことを口にしたのである。

「貴方は未だ此処のことを御存じ無いようですが、此処は寺僧が秘密に遊ぶ場所なのです。もし間違えてでも寺僧以外の者が此処に来た場合には秘密保持の為に殺害をさせていただきます。どうか誰かに見られないうちに立ち去つて下さい！」と必死の面持ちで言う。しかし源十郎のほうは納得がいけない様子で「…お言葉の意味が良く分かりませんが、先ず、貴女がたはどのような立場なのですか？」と質問を始めた。

二人の女性は緊急事態を分つて貰えないもどかしさで顔を見合わせたが、年少と思われるほうが「私は江州志賀の里、藤島平太と申す者の娘で名を松枝と言います。幼少から京に来て、或る撰家（撰政関白を出す公家）に仕えておりました。ところが今年の春に此の寺院の手の者に欺かれ誘拐されて此処に抑留された身です。一緒に居られるのは同じく誘拐された絹商人の妻女です。我らは麻薬を飲まされ、此処に捕らわれているので、其の秘密を知つた僧侶以外の者は殺されてしまうのです。以前にも此処に迷い込んだ者が無造作に刺し殺さ

れ裏山に埋められました。その様な訳ですから、早くお逃げなさい！」と助言した。

ところが源十郎のほうは、其処に居た女性が思ひも掛けず自分が助けられた藤島平太の娘と知り不思議な縁に感激して緊急事態を呑み込めない。松江に琵琶湖畔の事を説明し出した。其処に外出していた為空が帰つて来た。階段を上がつて来た為空は源十郎を見て、さりげなく笑顔で「貴方はどうして此処に居るのですか？」と訊ねた。

松江から聞かされていても為空の本性を知らない源十郎は「今日は我が主の清真殿が不在なので為空殿をお訪ねして此方に来ました。お留守でしたが何方かが双六をされている音を聞いたので、偶然に此処へ来てしまいました。貴僧方にも此の様な風流なお楽しみがあったとは知りませんでした。今まで良く隠していましたね。」と冗談まじりに言つた。為空は黙つて階段を下り、表の戸を閉じて鍵を掛けた。それから近くに居た小僧に命じて覚静という僧を呼び寄せ、二人で源十郎の手を取つて別の小部屋に連行した。其処は板囲いながら明らかに牢獄である。放り込まれた源十郎は為空からロープ、剃刀、毒薬の三品を与えられた。そして「…貴方は此の三品から選んで自殺を下さい。それが出来なければ私たちが殺すしかないけれども…」と親切に言つてくれた。有難いお言葉ではあるが簡単に承服する訳にはいかない。

源十郎は叫んだ。「私は、此の寺院にお世話になつていのですから、秘密を漏らすようなことはしません。どうか許して下さい。」すると為空が「此の僧房に秘密の誓願が有り、髪を下ろしている者が仲間の密遊（仏に仕える僧侶として恥ずべき行為）を知つても是を黙認する。しかし有髪の者（僧侶で

は無い者に知れた場合には、それが親兄弟、親友であろうとも許されることがない。そういう決まりであるから、貴方を助けることは出来ないのである」と拒否をした。

源十郎は「それならば、私は此の場で髪を下ろして僧になります」と言つたけれども、覺靜は「貴方は平素から勉学に励んでいるのですから大きな希望があるのでしょうか。今、此処で一時逃れに僧侶になる！と言つても明日になれば必ず私たちに背くでしょう。如何に弁じようとも赦すことは出来ません！」と迫つて来る。

困り果てた源十郎は力無く、自分が仕える清真を呼ぶように頼んだ。覺靜は「清真に頼んでも無駄ですよ」と言いながらも呼んでくれた。清真の顔を見た源十郎は「私は清真殿のご厚意で此の寺院に暮すことが出来たのですから、どうして秘密を漏らすことがあるでしょうか、どうかお助け下さい」と口説いた。清真もさすがに哀れには思つたのだが為空から「友一人の命より、寺の掟は重い。昔から此の秘密が僧侶以外に漏れた場合には生かしては返さない」と決めてある」と念を押されては返す言葉が無い。為空は既に短刀を持つて源十郎を刺そうとした。それを清真が押し留めてから源十郎に次の条件を提示した。

「源十郎殿、貴方の運は尽きたので生きる道は無いけれども、是までの誼（よしみ）で死後は丁重に埋葬し、菩提は懇ろに弔つてあげよう。そうすれば来世は必ず富貴の家に生まれるであろう。

此処で助けてあげたい気持ちはあるが其れは出来ない。せめてものの友情の証しとして五日間の猶予を与えるから、その間に三つの方法（自刃、服毒死、縊死）から選んで欲しい。絶対に五日を過ぎること

は許されない！」

親切な？宣告を下した三名の僧は厳しく言い捨てて其の場を立ち去つて行つた。残された源十郎は与えられた自殺用具の三品（短刀、毒薬、ロープ）を前にして、どの方法が楽かを考えて見たのだが、どれも好きにはなれない。絶望の淵で五日間、悩み抜いて最後は死ぬしか無いらしい。

一方、源十郎の危難を知つた松枝は、故郷の父母が助けた若者を自分の周りで死なせてはならない：と氣丈にも是を救助する方法を考えていた。牢屋に入れられた源十郎を助け出すには脱獄の手段を教えるしかない。頑丈に造られた牢は鋸か爆薬でも無ければ破壊出来ないが、天井部分は従来の建物の俣である。つまり天井部分を切つて屋根を壊し外に出れば良い。それを源十郎に知らせた

いのだが、松枝が牢に近づくことは出来ない。思い悩んでいる松枝の近くを一匹の鼠が通り掛かつた。此の屋敷に住み付いている鼠で、松枝は普段から餌を与えたりしていたから、顔見知りである。それを捕え、脱獄手段を書いた手紙を紙縫り（こより）にして鼠の首に巻き、牢の中に離し入れた。源十郎は僧たちから与えられた死の条件を、どの様にクリアしようかと、周囲を眺めていたのだが、其処へ首に何かを捲いた鼠が来たら思わず追い払おうとしたのだが、首の紙縫いに氣が付いて鼠を捕らえ手紙を読んだ。

「さては神明のお助けか……源十郎は鼠通信に従い、自殺用具のうち、ロープを梁に投げ掛け、其れを手繰つて柱に取り付き、天井に近づいてから力任せに天井板を蹴り上げると一か所に隙間が出来た。其処を短刀でこじ開け、屋根瓦を抜いて外に出ることが出来た。夜陰に紛れて寺院を脱出

した源十郎は都で知り合つた友人宅を頼つて駆け込み、事件を知らせて救援を求めたのである。友人は源十郎から聞いた経緯を告訴状にして検非違使庁に訴え出た。

一方、為空ら三名の方では約束の五日間が到来したので源十郎も諦めて死んだであろうと牢屋の扉を開いてみると死体が無い。愕然として周囲を見回したが牢の扉も牢内も異常が無く、此処をどの様にして逃げ出したのか不審に思つた。天井を見上げると一か所が僅かにずれている。さては屋根を破つて逃げたかと感心をしてしまつた。

源十郎が役人に訴えることは確実であるから一刻も早く逃亡しなければならぬが、不法監禁中の松江らを移動させたり、牢屋など悪事の証拠を消したりと緊急を要する作業が多い。多分、為空の僧坊以外でも同じ様な悪事が行われていたであろう。小僧たちに命じて無駄なことをさせている間に役人が踏み込んで来た。三名の悪僧たちは逃亡したが、氣の毒な下つ端の僧たちは捕縛されて簡単に全てを証言したから、近くの山の洞窟内に押し込められていた松江らも救出され、大寺院の怪しい犯罪が白日の下に晒されることになつたのである。捕らえられた僧らは追放刑とされ、監禁されていた者は釈放されたのである。

事件摘発の切っ掛けを作つた朝山源十郎には褒美として逃亡中の悪僧が所持していた財産が与えられた。救出された松枝は従来の職場に戻ることも出来たのであるが、源十郎が琵琶湖畔で松江の父母に救われた事情を役人に説明し、松江の身柄を引き取つた。一旦は本国に戻つて元の領地を買い戻してから、二人で志賀の郷を訪れて藤島家に行き、其れまでの二人の身に起こつた出来事を説

明し、改めて松江を妻にと申し入れた。藤島家では京に居た筈の松江と連絡が取れなくなつてから、最早、死んでしまったものと諦めていたので、想像も出来ない出来事と不思議な因縁に驚き、喜びを新たにしたのである。

源十郎は暫く志賀の郷で暮らしてから松江と共に本国に帰ったのであるが、陸路で無く琵琶湖を船で行くことにした。其の連絡船が出港して程なく源十郎は船内に為空ら三名の悪僧が潜んでいるのに気付いた。舷側に立った源十郎は大声で三名の僧の悪事を叫んだので、悪僧たちは船底に隠れたけれども、源十郎の使用人と船頭が協力して彼らを捕らえた。此の時に源十郎は清真を呼び「貴僧も共に役人に引き渡すべきだが、私が殺害される際に五日間の猶予を与えてくれた恩がある。」として役人には引き渡さず、見逃したのである。松江と共に故国越前に戻った朝山源十郎は其れから家富み榮えて子孫まで繁栄したと言う。

勧善懲悪の見本のような話なので出来過ぎてゐるから、真偽のほどは分らないが、暴頭に述べたように仏教界が墮落した時期が有つたようなので有りそうな事件のように思われる。奈良時代の人々は、こういう話を作つて犯罪防止を心掛けていたと思えば、祖先崇拜の念も起ころ。

【風の談話室】

陸平を「イン」する会の田島早苗さんから、便りが届いた。昨春から二度の骨折と、脳内出血の養生で、すっかり体力が落ちてしまったという。

最近、娘さん夫婦の家に同居したとの転居の便りであった。日々の風のつたの二三首でも投稿頂けることを楽しみにしております。

十一月三日から八日まで、打田昇三兄の「私本・平家物語」の全十二巻が完成した事を祝い、ふるさと風の会の文集を中心にした作品展を、石岡市まちかど情報センターで開かせて頂いた。

打田昇三兄も八十四歳である。平家物語の私訳が終つたので、次は「私本・将門記」を書くつと話されている。

当会会員も皆高齢化で、何とか若い人の参加を願っているがはて……。

さて、今月も京都府の今井さんから「私の国府巡り」の原稿が届きました。これからは非・国府六十余巡りの投稿をお願い申し上げます。

《読者投稿》

私の国府巡り「安兵衛」 京都府精華町今井 直

三楽（寧楽・相楽・信楽）は、聖武天皇が次々と変えた都の所在地である。奈良は「寧楽」と書かれ、万葉集に「青丹よし寧楽の都は咲く花の……」とつたわれている。相楽は平城山（ならやま）の裏手の山背（やましろ）にあり、現在の京都府木津川市の一帯をいう。山背国相楽郡蘆原（みかのほら）に造営された都が、恭仁宮（くにのみや）。百人一首の「みかの原わきて流るる 泉川……」でも知られる所だ。

③「山城」と表記されるのは平安期から。泉川は現在の木津川

そして紫香樂宮（しがらきのみや）は、信楽（しがらき）焼きのタヌキで有名な滋賀県甲賀（こうか）市信楽にあった。

七三七年に天然痘が大陸から九州に上陸し、とうとう平城京に蔓延した。常陸国の国司を勤めた藤原宇合など、政権の中枢にあった藤原四兄弟が相次いで疫病に罹り命を落とした。藤原氏に代わつて実権を握つたのが光明皇后の異父兄・橘諸兄（たちばなのもろえ）で、帰国した遣唐留学生たちを重用したため、宇合の嫡男・藤原広嗣（ひろつぐ）は、遠く大宰府に左遷されたことを恨み、七四〇年、反乱を起こしてしまう。

疫病や反乱をきっかけに、ウツ病気味で情緒が不安定だった聖武天皇の奇怪な彷徨が始まる。伊勢・美濃などを巡つて、都に帰らずそのまま恭仁宮に入り、その後も難波宮・紫香樂宮と遷都を繰り返し、結局は七四五年に平城京に戻つてしまう。恭仁宮も紫香樂宮も新都建設のさなかで「咲く花の匂ふが如く」にはほど遠く、また非常に短命な都であったが、歴史の上で極めて重要な時期であった。恭仁宮では国分寺・国分尼寺建立の詔（七四一年）が、紫香樂宮では大仏造立の詔（七四三年）が出されたのである。甲賀寺（こうかでら）で始められた大仏造立は廃都に伴い中止となったが、完成していれば「奈良の大仏」ではなく、「信楽の大仏」として世界遺産に登録されたかもしれない。

都の機能が平城京に移ると、恭仁宮跡は「山城国分寺」に生まれ変わるこゝとなつた。大極殿は金堂に転用され、約80m南東に七重塔が新たに造られた。塔跡の土壇には、15個の礎石が良好な状態で現存している。いずれも柱を固定するためのホゾが加工された巨大な花崗岩である。

大極殿跡の立派な石碑には、『山城国分寺跡 舊恭仁宮趾』と刻まれており、昭和十六年に京都府が建てた。傍には、『史跡山城国分寺跡』の碑もある。

り、昭和三二年に国の史跡指定をうけて建てられたようだ。

土壇の北側の端に、石碑が更にもう1基ある。背丈は約1・8mで、頭を東に『恭仁宮大極殿趾』と書かれた面を南に向け、草むらに台座ごとゴロンと横向きに寝かせている。こんな行儀の悪い碑は見たことがない。なぜ誰も起こしてあげないのだろう。碑の背中には『昭和四年春 京都三宅安兵衛遺志建之』とある。安兵衛？堀部安兵衛なら赤穂義士だが、いったい安兵衛って誰なのか？

市の教育委員会に聞くと、元々この碑は塔跡の前に建っていたという。研究者から場所が違うという指摘が続いたため、撤去し大極殿跡に移設しようとした。しかし、文化庁が史跡に民間人の石碑を建てるべきでないと許可が出なかった。居場所を失ったこの碑は、二十数年間も放置されてきたのである。結局、安兵衛とは名所旧跡好きのお金持らしい……としかわからなかった。

同志社大学京田辺キャンパス内に、筒城宮(つきみや)伝承地の碑がある。碑文に多分「安兵衛」とあったことを思い出した。筒城宮は、仁徳天皇の浮氣に嫉妬した皇后・磐之媛(いわのひめ)が都を出て最期まで暮らした所で、また継体天皇の宮も置かれたという。確かめると、宮址の『継體天皇皇居故趾』碑は、やはり安兵衛が建てたものだった。近くの山背国綴喜(つづき 郡井手に、橘諸兄が別荘をかまえたと言われるが、「綴喜」の地名は「筒城」に由来する。

さて、グーグルで検索すると、安兵衛の碑の研究者がいることがわかった。調べた中村武生氏によると、三宅安兵衛は、今から百年ほど前の西陣の帯地卸商人。苦勞を重ねて遂に功成り名をとげ

たが、自分を育ててくれた京都の街に恩返ししたい。神社仏閣旧跡が多く千年の歴史を誇る街なのに、京都を知らぬ者が多いのは道標が少ないからだ。案内碑を建てよう！家督を継いだ長男清治郎は、父の遺言を守り京都市内から南山城にかけて、昭和の初期に四百基以上も建碑した。費用は今のお金に換算しておよそ一億円。安兵衛が残した資金に加え、同額分を清治郎が負担した。碑陰は必ず「京都三宅安兵衛遺志建之」で、清治郎の名は一切ない……と云うことだった。

誰もがよく石碑の前で記念撮影するが、後ろに回って碑陰を撮る人は滅多にいない。つい最近まで私もそうだったが、今や石碑をグルグルと廻る癖がついてしまった。南山城に住みながら全く気づかなかったが、安兵衛碑をあらちちらで見かける。

山城国分尼寺跡の安兵衛碑があると聞いた。山城国分尼寺跡とは初耳だが、恭仁宮跡の南を流れる木津川の対岸だそう。法花寺野という地名から可能性がある。(注)国分尼寺の正式名称は「法華滅罪之寺」府道の道端の草むらを、「マムシに注意」の看板を横目にビビりながら進むと、安兵衛さんが立っていた！碑陽は『甕原離宮国分尼寺遺趾参考地』、碑陰は確かに『昭和四年春 京都三宅安兵衛遺志建之』だ。風光明媚な甕原へ元明天皇や聖武天皇の行幸が度々記録されているが、離宮と尼寺が同一場所かどうか、また所在地すら未だ確定されていない。

府立山城郷土資料館で聞いてみると、「伝聞や推測だけで碑を建てられても……」と冷やかだ。しかし国府巡りをしている私には、『参考地』でも石碑は非常に有難い。被写体として礎石や復元建物な

ら絵になるが、草が生い茂る史跡は、石碑がなければただの空き地にしか見えないからだ。

安兵衛碑は圧倒的に道標が多い。JR奈良線玉水駅近くにある井手史蹟名勝碑には、『玉ノ井頼宮跡 四丁橘諸兄公故址 五丁』などと刻まれている。現代においてはGPSの発達やカーナビ等の普及で、案内碑や道標は本来の役割を終えており、交通の妨げになることもある。宇治茶の主産地・宇治田原町郷之口の交差点に建つ道標は、昭和三年秋に建碑された安兵衛碑を、平成十三年に再建したものだった。後世に残す大切な碑なのかと思ひ、町の観光課に問い合せると、トラックが自損事故で壊してしまい、運転手が全額弁償し復元したという。

そんな事情もあるのかと思っていたら、先日、嬉しいニュースが届いた。今秋十月七日に、二十余年余り寝そべっていたあの安兵衛さん・恭仁宮大極殿趾碑が、遂に起き上がったという。地元有志や関係者たちの長年の尽力により、文化庁が理解を示しOKしたのだった。早速、私は安兵衛さんに逢いに行った。かつては都の大極殿だった重要な史跡だから、石碑を動かすのにパワーショベルなど重機は使えず、すべて手作業だったという。大極殿跡から下に降ろされたが、土壇に寄り添うように東を向いた安兵衛さんの立ち姿は、スツキリと爽やかであった。

養生日記(詩二編)

堀江実穂

『人が怖い』

誰でも持っている気持。

人に嫌われたくない。
良く思われたい。
好かれ、愛されたい。
誰でも自分を良く見せようとする。

病気になってから特に人の目が気になる。

障害者だから恥ずかしい。

人にどう思われているのだろうか。

人の目には自分はどう映っているのだろうか。

バカにされているかも知れない。

低能な人間だと思われているかも知れない。

他人が自分を見る目が怖くてしょうがない。

病気になりたくなかったわけじゃない。

障害者になりたくなかったわけじゃない。

私以外の人の目が怖いのだ。

勿論、病気や障害を理解してくれる家族、友人、

医師、スタッフはいる。

でも、その他の大勢の人は、まだまだ病気や障

害のことを知らないし、偏見をもった目を向ける。

人が怖い。怖くてたまらない。

毎日その恐怖とたたかっている。

『肥えていく』

精神科の薬を飲み続けて8年になる。

学生時代の友人に久しぶりに会った。

友達は変り過ぎた私の姿にビックリ。

学生時代から比べて40キロ以上も太ってしま

った。

停止することなく毎日太り続けていく。

太り過ぎでコレステロール値が高くなり、脂肪

肝だと言われてまた薬を飲んでいく。

満腹感がなく食欲が止まらない。

精神薬を続けると太って来ると言う。

しかし、薬をやめるわけにはいかない。

薬を飲まないと幻聴・幻覚に苦しむことになる。

エコーに写る脂肪達。

大事な臓器が脂肪に包まれ身動きが取れないよ

うになっている。

どんどん肥えていく私。

どこまで肥え太るのか。

不安になる日々。

喰わなきゃ痩せると言うが、それもまたストレ

スになって襲い掛かってくる。

どんどん肥えていく。

十月は堀江さんから十数点の詩文が送られてきた。

そのうちの何を選択して、この投稿欄に載せるかは

編集者の偏見による独断である。しかし、選択に偏

見と独断が許される本数の原稿の寄せられること

は大変に愉快で楽しいことである。

《一寸一言・もう一言》

Ⅱ一寸一言Ⅱ

癌と共存

菅原茂美

今の日本は、国民の二人に一人は癌になり、三

人に一人は癌で死亡すると言われる。昔は本人に

告知しなかったり、病名を隠したりしていたが、

今はしっかり告知し、本人が認識の上、ちゃんと向

き合って生きる時代となった。

私も二つの癌（2000年前立腺・14年膵臓）の手術

を受けたが、いずれも超早期発見・早期治療のた

め、回復も早く、後期高齢者でも、仕事・趣味に

情熱を燃やし続けている。

がん細胞は決して簡単には死滅しない。しつこ

く生き残り、再起のチャンスを狙っている。なら

ば適切な処置を施し、敵と同居もやむを得ず、暴

走を食い止めながら共存の道を選ぶ他ない。癌と

仲良くなどしたくはないが、暴走を抑え、強烈な

副作用などなければ、健康に近い状態を維持し、

目を輝かせた人生を送りたいものだ。

「ピンピンコロリ」が理想：などよく言われる

が、後期高齢とはいえ、何かしつかり目標を持つ

て生きているからには、それを成し遂げる途中で

プツンはゴメンである。昨日まで元気で急にコロ

リはないだろう。ひ孫の顔も見たい。もっと高

段の暮も打ちたい。コラムも書き続けたい。科学

の進んだ新世界も観たい。欲は深い夢は持ち続

けたい。高齢者は、がんや成人病が多少あるのは

やむを得ない。あるならあるで、それを飼ひ馴ら

し、かかりつけの主治医や家族と一丸になって防

衛線を張り、健康に近い体制を固め、自分のやり

たい事を、ささやかながらも、やり続けたいと思

う。病気に滅入る事なく何事も前向きが第一。い

つも厳格ではなく、ちよつとフアジに…。

Ⅱもう一言Ⅱ

火山噴火と人口動態

菅原茂美

日本列島は火山列島である。日本は世界の陸地の0・25%に過ぎないが、全世界の火山の7%に当たる110の火山が存在する。気象庁はその内、特に警戒を要する47の活火山について、噴火警戒レベル1～5の警報を発している。

富士山はレベル1（活火山である事に注意、レベル3（入山規制）は阿蘇山と桜島で、レベル5（避難）は鹿児島県の口永良部島（現在全島避難中）である。茨城県には火山はないが、関東ローム層は古富士、箱根、浅間、男体、赤城山などからの火山灰で、赤褐色の粘土層である。

昨年の大被害を起こした御嶽山は現在レベル2であるが、全国活火山を取り巻く自治体の避難計画はまちまち。早急な整備が重要である。

特に富士山は年間30万人の登山客があり、1707年の宝永大噴火以来300年間も鳴りを潜めているが、1100年前の三陸沖貞観大地震の時は、その余震として、富士山も大噴火を起している。直ちに厳重な警戒が必要であろう。

縄文人は、日本列島に10万人いた。この密度なら大きな噴火があってもそれほどの被害はなかったろう。しかし今日では、噴火に比べたら遙かに規模の小さい集中豪雨の土石流でも、多数の犠牲者が出る。時代に応じた対応が必要である。

さて我々ホモ・サピエンスの祖先は、今から20万年前アフリカでホモ・エレクトス原人から新人として分派誕生。その数5千人ぐらいと言われる。その新人の一部が今から7万年前、数百人の規模でアフリカを出、アラビア半島に定着した。この黒人群が現在の全人類の祖先である。以降アラビア半島付近で1万人ほどに増えた時、インドネシアのトバ山噴火により、噴煙が成層圏にまで達し、全地球に太陽光は十分届かず、植物は大量に枯れ、人口も千人ほどまで減少。それから人類は世界に拡散。北東に向かった群はシベリアからベーリング海峡（当時陸続き）を渡り、南北米大陸まで。東に向かった群はオセアニアにまで達した。

古代の日本列島の住民は、ヒマラヤの南周りで来た南方系縄文人と、北周りで来た北方系縄文人からなる。これを私は人類の「遙かなる旅路」と名付けて、色々書いてきた。中東から更に北に向かった群は、現ヨーロッパで同じエレクトスから30万年前に分岐したネアンデルタール旧人と混血。金髪や青い眼を受け継いだともいわれる。

狩猟採集生活からメソポタミヤあたりで12万年前、初めて定住農耕が始まった頃は500万人に増えた。文明が始まった5500年前には、1千万人。進展して1800年前には16億人に達した。15世紀末、新大陸が発見され、トモロコシやイモ類を多用。人口は増え、産業革命の頃は72億人となり現在72億人となった。

地球の人口支持力は120億人。人類の異常な繁殖力は、すぐその支持力を超えそうである。人類に明晰な知能があるのなら、せめて狼なみの自制力を持って、自らの個体数をコントロールする機能を持たなければ、愚かな戦争を繰り返し、最悪、人類滅亡の大悲劇が待っている。

《ことば座だより》

今年のことば座公演は終了したが、11月29日ギター文化館で行われる「中川果林の25弦箏の演奏会」を共催することとなった。中川果林は、茨城県牛久市の生まれで、12歳で25弦箏に出会い、14歳にしてオリジナル楽曲でプロデビューを果たした。現在ドイツに住み、ヨーロッパ各地で演奏活動を行っている。

小生の下で一緒に仕事をしてきたしおみえりこ

のプロデュースであるが、彼女のご主人であるクラリネット奏者の橋爪恵一氏には、ことば座の舞台に何度かお手伝いを頂いている。東京公演でも音楽監督を担当して頂いた。

日本的な音色とは全く異なる和と洋の音階を持つ25弦箏の魅力を楽しんでいただきたいと思います。

さて、少し紙面が出来たので、手話舞の詩を久しぶりに紹介してみたいと思う。

言葉は心の容

心を容にする。それが言葉です。

だから

言葉には容があり、
そして姿があるのです。

言葉の姿は舞。

舞は人の語る言葉の姿なのです。

だから

舞は自由で自在でなければならないのです。
詩は心の譜面です。

だから

詩を詠うとき心は自然に舞い
肉体は踊りはじめるのです。

詩は心の中に潜んでいる自分の真実を
流れにする譜面です。

だから

詩は言葉に書くのではなく
声に詠うことで紡がれていくのです。

その時、人はまだ十分な言葉を持ってはいなかつ

た。

でも若者達は他愛もない笑いの中から、心を表す言葉の生まれることを予感していた。

若者達はよく笑った。

笑いで全ての心を表そうと考えた。

嬉しい笑い

楽しい笑い

気持ちの良い笑い

悲しい笑い

淋しい笑い

笑いは心の表現の全てです。

乙女等は男たちの投げる優しく心に響く笑いを待った。そして、恋の言葉が生まれた。

来年のことを言うと言いが、ましか情報センターで作品展を初めて行い、人通りのないことに改めて驚いた。来年は、人通りを呼ぶことにはならないだろうが、ここで投げ銭ライブステージでも考えてみるかと、思いついた。何もしないでボヤいていないで、先ずは行動でふる里をヨイショしなくてはと思ったところである。

風の談話室では、皆さまからの投稿を募集しております。4000字詰め原稿用紙5枚程度までを上限の目安に、詩文・随想など形式、テーマは問いません。住所、氏名、筆名希望者は筆名を添えて、編集事務局へ投稿下さい。

毎月25日〆切で、翌月号に掲載いたします。

俳句、和歌、里謡、不文律の二行詩など、言葉に表現する物なら何でも構いません。

投稿お待ちしております。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第三、(四・1)

日本先住民族の縄文人などが平和に暮らしていた頃に何らかの事情で中国大陸や朝鮮半島、或いは中近東に居られなくなり、日本に夜逃げをして来たか押し掛けて来た民族が居たのであろうか。紀元前五百年代にオリエント全域を支配していたペルシア帝国時代の軍人の石像(服装)が、日本の神話に出てくる神様の服装に酷似しているのが気になるのだが、盗撮した写真なので公然とは調べられない。日本列島の原住民以外は他国から侵入して来たのであるから、幾ら立派な神話や伝承を残していたとしても、其の連中が侵略者であり夷狄(いてき)の部類であることに違いは無い。

夜逃げ族が少しずつ勢力を増して国家らしいものを作って来たと、権威付けの為に「建国の歴史」を残す必要に迫られてくる。正直に「喰いつめて夜逃げして来ました!」と書けば良いのだが、面子が有るから適当な神様を登場させて、遂には「天から舞い降りて来た:」などという大嘘で権威付けをした。「古事記」や「日本書紀」は都合の悪いことを何でも神様の所為にして誤魔化していたから日本の歴史は人間としての記録に欠ける誇大妄想的なものになってしまったのである。然も其れが昭和二十年の敗戦による歴史の見直しまで「国家の記録」として全国民に強制的に叩き込まれていたのであるから、恐ろしいと言うか、無智と言うか、国民に与えた其の精神的な被害は大きい。

歴史は人間が創るものであるから、其処に神仏の

登場する余地は無いのが本来なのである。そう言う素晴らしい嘘で固められた日本の歴史で草創期に登場する幹部の神様に天兒屋根命(あめのこやねのみこと)がいた。大日本帝国時代だと「神様が居られた」と書かされたが、忙しいので敬語は省かせて頂く。名前からすると雨漏り修理が専門のように思える此の人物が、実は「祝詞(のりと)」を司る係であり、天皇家が祖先とした天忍穗耳命(あめのおしほみみのみこと)天照大神の長男に近い序列を持つ神様業界の幹部社員である。それを素性の怪しい藤原氏が奈良の春日大社に武甕槌命と一緒に祭祀して自分の氏神とし「麦わら程度の藤原」に箔を付けていたのである。

武甕槌命は日本列島が未だ開発されていない時代に、素晴らしい土地であることに着目して出雲族などと共同で各地の開発を進めていた事業家のような神であり、大和朝廷などは口も聴いて貰えない程の偉い神様であつたらしい。大和王朝が後から捏造した日本神話でも天照大神と同格、もしくはそれ以上の扱いをしているのが何よりの証拠である。鹿島神宮に祭祀されているのは、鹿島灘沿岸から採れる砂鉄や塩も武甕槌命系列の会社の重要な事業の一環であり、藤原一族も其処で従業員に雇って貰っていたからであろう。

フェアでは無いが藤原氏が天兒屋根命と武甕槌命を祖先に採り込んだのは大正解であり、実に都合の良いことであつて御神託と財力と武力とを自分の好きに出来る。その所為かどうか奈良時代、平安時代にかけて藤原氏が天皇家に寄生して勢力を広げ日本を好き勝手にしていた。尤も藤原一族にもピンからキリまで有ったようで、誰が決めたのか根拠のない「家ガラ」とか「鳥ガラ」によりピン組に入れたのは極く一部、大部分の家系はそこそこ地位しか貰

えなかつたようである。

保元の乱、平治の乱を切っ掛けに戦鬪力を擁する平清盛が急速に力を得てきた頃、「そこそこ組」に居た大納言の藤原成親が、平家に恩義を受けながらも焦って反平家運動に関わり身を滅ぼした話は既に紹介している。巻第二「大納言死去」の文中には大納言・藤原成親の北の方を「山城守敦方（系譜不詳）の娘なり」とする記事が有り「明月記（日記）」の著者で歌人としても知られた藤原定家に関わる著書には定家と成親と平維盛（重盛の嫡男）の関係図が載っていた。当時は一夫多妻の時代であるから婚姻関係も複雑な事は分かるが「紅旗征戎は吾が事に非ず（こうきせいじゅうはわがことにあらず）合戦のような殺伐とした出来事は私に關係ない」と割り切つて、後鳥羽上皇から命じられた「新古今集の撰進」に没頭していた文化人の定家であるから、公卿なのに中途半端な策士でクレーダー遊びも好きな成親と無理に親戚にされたのは不本意であつたと思う。

藤原定家のように、自分の道筋が見通せる者は良いけれども、公卿でも武士でも組織の枠に組み入れられた者は自分の運命が主人公であるから勝手には変えられない。「大臣流罪」のように国家の頂点に居た者さえも或る日、突然に流罪にされる素晴らしい時代がやって来たのであるから平家という別枠に入つて居ない役人たちは戦々恐々としている他は無かつた。

然し乍ら世界中に登りだけの坂が無いように頂点に達した後は誰でも下るしか無い。桓武平氏でも怪人二十面相でも運命の公式は例外無く適用されるため、さしも権力を誇っていた平家の賞味期限切れが近付いた……ことも確かであり、それを察知したのか、焦った平清盛が「大臣流罪」という暴挙を敢行し、

勢いに乗つて後白河法皇のことも流すのである。京都市内の三十三間堂近くから鳥羽に移るだけであるからタクシー代も大してかからず「流す」と言えるかどうかは別にして法皇という權威に清盛が踏み込んで来たことになる。

傍若無人（ほうじやくぶじん）とも言ふべき行動に対して、そもそも「平家とは何者？」それまでは当然の様に天下に君臨していた、此の得体の知れない存在に日本中が改めて懷疑の目を向け出したのである。清盛は「法印問答」の中で、平家一門が朝廷に尽くしてきた功績の数々を盛んに言い立てていた。後白河法皇の使者として来た静憲法印は怯むことなく「平家が受けた恩」の浅からぬことを主張した。この段階で清盛は理論的な敗北を喫したのであり「平家が頂点では無い」――禁断の評価が公然たるものになったとき、世論の中では平家の没落が始まつていた。

その劣勢を挽回しようと清盛は強引な実力行使を開始したけれども、其の事が逆に作用して平家一族に不満を持つ諸国の武士階層に「夢と希望」を与えてしまった――平家も野心家の集団に過ぎず俺達にも「平家に代わる資格はある」のだと、其れまでは諸国に埋もれていて平家一門の顔色を窺うだけであつた有力武士団の誰もが思い始めたのである。こういう錯覚は一つに纏まると手強い。

行隆之沙汰（ゆきたかのさた）のこと

面白いことに此の章段に登場する行隆と言う人物は、平家物語の作者の一人に擬される信濃前司行長の父親とする説がある。反論も有るようだが何らかの関わりは有るらしい。誰が書くかが読者にとつて

は話が面白ければ良いのであるけれども作者候補が浄土宗系統の僧籍にあつた者……となると幾分かの説教臭い話に目を瞑るしかない。

先の関白で平清盛に追放された松殿こと藤原基房の侍に江大夫判官遠成（このたゆうはんがんとおなり）と言う者が居た。是も平家に憎まれて六波羅から軍

勢が押し寄せ、捕縛される立場に在つたから息子の江左衛門家成を連れて何処かへ落ち延びようと家を出た。京都伏見区にある稲荷大社背後の山に登つて馬から下り、父子で言い合せたのは「東国の方へ落ちて伊豆に流されている前右兵衛佐頼朝を頼ろう」と思ったが、（頼朝も今は未だ天皇の咎（とが）を受け）た罪人であるから、自分一人の身も自由にならない立場であろう。日本国中に平家の莊園では無い場所が見当たらないような現状では伊豆国も自分たちの安住の地にはならない。わざわざ遠くまで行つて捕まるよりは地元で暴れたほうが恥を搔かないで済む。そうと決まつた以上は、自分の屋敷に戻つて六波羅（平家方）から呼び出しが来たら切腹して死ぬまでである！――と悲壮な決意を固めて川原坂という場所に在つた屋敷に立て籠つた。

現在の京都市東山区阿弥陀峰の南で八条から山科へ抜ける坂の途中とされる。予定どおり六波羅の平家屋敷から源大夫判官季貞、摂津判官盛澄に率いられた軍勢三百余騎が押し寄せて来た。原本に「ひた甲（かぶと）三百余騎……」とあるのは、全員が完全武装をしていることを示している。護る方にも何人かの家臣が居たとは思ふのだが、原本を読む限りでは検非違使五位の大江遠成父子だけで三百騎と戦つたようである。

そうは言つても相手が三百も居てはゴキブリ退治でも容易では無い。敵は調子づいて関（とき）の声を

挙げた。大江遠成は縁側に出て来て大声に叫んだ。「各々（おのおの）方よ。是を見よ。そして六波羅に戻ったならば（清盛に）有りの俣に伝えよ！」と言いながら屋敷に火を掛け、父子が揃って切腹をして猛火の中に果ててしまった。

そもそも、この様に多くの人たちが被害に遭うのはどうしてか？と言えば「大臣流罪」にあつたように平家を中心とする勢力と、それを快く思わない勢力（反平家勢力の火種のような勢力）とが事に触れて対立する兆候が増えてきたのである。

新たに関白になった二位中将・藤原基道（清盛の嫡と、前関白（藤原基房）の子で後白河法皇が推す三位中将・藤原師家との、中納言欠員当時の後任争いも、その一例である。そう言う事情であるから、本来は前関白の藤原基房だけが（清盛の恨みで）仕返しをされても仕方が無いのであるけれども、その巻き添えで基房に近かった四十余人もの人々迄が処罰を受ける（災難に遭う）と言うのは何とも道理に合わない出来事である。去年は保元の乱で敗れた崇徳上皇に「讃岐院・崇徳天皇」の号を追贈し、同時に悪左府と呼ばれた藤原頼長に贈位増官をして世の中の平穩を祈ったけれども一向に効き目が無い。その原因は保元の乱で敗れた者たちの（怨念の）所為で世間が騒がしいのでは無くて、どうも平清盛の心に天魔が棲みつており、神仏がそれを腹に据えかねて居られるようなので、是から先も神仏対清盛という形で、どのような出来事が起こり、天下が騒がしくなるかも知れない。それを思うと、京中では誰もが恐れ戦（おのの）いているしか無かった。

その頃に、前左少弁行高（さきのさしやうべんゆきたか）という人物が居た。今は亡き中山中納言頼時の長男で二条天皇の代に弁官（太政官に属する判官職、学問に通じ

ていないと務まらない）に加わって羽振りが良かったけれども、此処十年ほどは、なぜか官職を停められ、夏冬の衣替えも出来ない暮しに追い込まれ三度の食事も満足に摂れないような有り様で、その存在さえ人々に忘れられていたような状態であつた。

その中山行高の許に、平清盛入道から手紙が来て「お話することがあるから、平家屋敷に必ず来るように！」と言われたのである。行高は「此の十年ほど平家一門とは何の関わりも無かつたのに誰かが告げ口などをしたのであろうか？」と大いに驚き、出向いて行くどころか家中で泣き悲しんでいた。しかし平家屋敷からは何度も催促が来るので行高は覚悟を決めた。相手が貴人の屋敷であるから、歩いて裏口から……と言う訳にも行かずに身内か知人かに御者と牛付きで車を借り、西八条の平家屋敷に恐る恐る出向いて行つたのである。

平家屋敷の玄関先で平伏したまま固まっていると予想外に清盛入道が機嫌良く出てきて言つた。

「そなたの父である中納言殿とは、良く仕事で色々な打ち合わせなどをした間柄である。従つて貴方のことも祖略には思っていない。行高殿が長いこと官職に就けずに居られたことも承知していて何とかしなければと思つていたけれども、人事は法皇が握つて居られたので是まで見ているほかは無かつた。今後は公務員として出仕が出来るように、役職についても近く申し渡すことが出来るようにする。今日は早く帰つて家族に知らせるが良からう……」是を聞いた行高は夢かとばかりに驚き牛車のスピードを馬車並みに上げて戻つた。

飯の宿に居た女房・子供も、さながら死者が生還したように喜び合つたのである。清盛入道は先に大江遠成を攻めた源大夫季貞に命じて、中山行高に与

える荘園の権利書などを渡し、暮らしの費用にと絹二百反、黄金百両に当座の食糧として米を呉れた。さらに朝廷に勤務する支度として何名かの家臣、牛飼、牛車まで与えたのである。

当然の事ながら中山行高は「夢か？」とばかりに驚き、かつ喜んだ。程なく、五位の藏人（このくらんど）天皇の側近で名家の者が選ばれた。当時の典型的な出世コースに補され、やがて左少弁に復帰できたのである。丁度、五十一歳になり、今更ながら若返つた思いであつた。しかし是も平家人事の一時的な栄華のように見えた。

この章段は、平清盛に敵にされた関白・藤原基実の家臣である大江遠成父子の悲運と、清盛に拾われた中山（藤原）行高の出世を対比するような内容であるが、読者の印象としては平清盛の行動が自分の情実に支配された「依怙鼻眞（えこひいき）」の感を免れず、専門家もその様に批評している。平家物語の原作者も平家没落（滅亡）が先にあるから少しづつ平家を悪者にする為の苦勞をしているのである。中山行高のことにしてもエリートコースの公務員（弁官）であつた者が理由も不明な状態で急に職を解かれ、十年も経つてから、それに気付いた平清盛が復職させてくれる……内容は「桃太郎のお伽噺」程度のものであるが平清盛の心境の変化に、権力の頂点にいた平家の没落の前兆が感じられないことも無い。（続く）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>